げて要請してきた訳です。この間、フラッシング事業（鳥屋野潟の浄化）という実験的な形で綺麗な水が入っていた訳ですけれども、さらにこのたび環境用水の許可を正式にいただいたものです。

また、私どもは亀田郷で採れる農産物についても、安全で安心なものを提供したいという観点のもとに、水路の溝畔について、農薬を使わないで、機械で或いは手刈りをするという事を3年程やってきております。

そんな中で、農地・水・環境保全向上に向けた国の施策が昨年から動きまして、これが非常に地域に好評でございます。農家の人達が維持管理をするだけではなくて、地域に住んでいるあらゆる人達が休みの日に一緒になって作業をするようになっています。これは農水省としては大変ビッグな政策であっただろうなと思っております。

実は亀田郷には、視察者が大変多ございます。年間2千5百から3千人位の視察者が来ております。一番多いのが小学生の子供達、併せて市民大学講座、大人の方々も来ておられます。さらに外国の皆さんも結構多ございます。特にＪＩＣＡを通じて、アジア・アフリカの方々が百名ほどいらしております。

もう一つは私どもは、財団法人亀田郷地域センターという組織を持っておりまして、土地改良法の枠を越えて、地域住民の皆様方と共に仕事をさせてもらっております。

例えば食の安全・安心に関するものでございまして、春には田植え、秋には稲刈り、その刈った稲を稲架（はさ）にかけてやるというような体験会を開いております。或いは果物、野菜、また、大豆を作って、それを取り入れて味噌を作るという体験会も行っています。

この９月の始めには、郷内の担い手、農地・水の団体、生産組合・法人、ＮＰＯ団体などから集まっていただいて、亀田郷農産物の生産加工販売戦略会議を立ち上げました。

また、先ほど市長さんからお話がありました通り、交流人口を増やさなければいけないという事で、モノレール構想を発表しております。地域と共に、そして新潟市の発展のために、協力していきたいと思っております。

**伊藤教授**　ありがとうございました。大変なハードからソフトを取り組みしていただいている訳でございますが、内村局長、只今の篠田市長、五十嵐理事長からお話されたような、この地域のこうした取り組みにつきまして、国のお立場としてはどんな事を期待しておられるかお話をしていただけますでしょうか。

## 「身土不二」のモデル都市として

**内村局長**　今、市長の方からはとにかく水田を水稲として利用する、或いはまた理事長の方からは水田の多面的機能を踏まえた色々な取り組み、或いは環境用水のお話がありました。

今、農水省のほうでも、政府与党一体となって、水田のフル活用ということで色々な対策を来年度に向けて検討されているところです。今色々見直されている中で、水田が環境を含めた多面的機能を発揮するには、田んぼは田んぼであるべきという事で、見直されてきていると思います。

ただ一方では、お米も主食用のお米とすればどうしても需要そのものが頭打ちの状況がある。人口減社会の中である。そういう事から海外に打ってでる。或いはもっと米粉を含め、また餌米等の他用途への利用ができないかという話、特に小麦は毎年540万トン消費されている訳ですけれども、その内の490万トンは輸入に頼っています。それを1割でも小麦代替と使えば、日本のいわゆる過剰米というものは消化できるという状況もあります。それを見据えて新潟県の方ではＲ10（アールテン）プロジェクトということでやっていますし、そういうものを含めて対応していきたいと思います。

ただコストという面がありますので、当然それは生産費をまかなわなければなりませんが、やはり一方では大規模化を図りながらやっていかなければならない。そういう意味ではまだ引き続き基盤の整備の強化が必要ではないかと思っておりまして、またそういう意味でのご支援をしていきたいと思っております。

この亀田郷地域、本当に新潟市の中でも都市的な集積が進んだ地域に近接していて、そこに広大な農地が広がるという事で、今、市長がお進めになります日本海側で唯一の政令指定都市、かつそこを田園型拠点都市として進めていかれる上で、先導的なモデルになる地域だというふうに非常に期待しているところです。

特に日本の食の問題色々と言われますが、やはり日本の食と農というものがどんどん離れていってる状況があるのではないかと思います。いわゆる身土不二という、地産地消の代名詞として言われますが、やはり水と土は一体、二つにあらず一体のものだと。体の元となる物はその土地から摂るというものが、旧来の、昔の自給自足の生活でした。

ただ世の中が、経済がグローバル化していく中で、それらの距離が広がっていったのではないかと。一つには産地と消費地の距離の拡大、どんどん輸入というものがあって、一方では最近「フードマイレージ」という言葉が使われますけれども、やはりそれを運ぶためには、それなりの$CO^2$を排出しています。或いは日本で作る以上に、日本の農地以上で作っている訳ですから、日本は水の輸入国でもあり、バーチャルウォーター等とそういうもので言われています。それ位産地と消費地が離れてきていると思います。

そういう意味で考えると、この亀田郷地域、新潟市の中心部と隣接しているという事から当然、消費地に近いという事もありますから、地産地消というのは地域の生産物は地域で食べようという事ですが、逆にそれに対して供給しなければいけない、いわゆる地消地産というものが大事だと思います。やはり地域のニーズに応える形で、米に限らず、この地域は野菜、果樹、花卉、色々やっておられますし、更にまた生産の増強を図れるのではないかと思います。

一方では加工については、先ほど市長のお話にもありました、新潟県は全国の米菓会社の半分が新潟に立地しています。そういう中で、逆に地元のお米を使っているかというとなかなか使っていない。約6割近くはＭＡ米という輸入品を使っているという実態もありますし、それらに供給できる能力は十分にある訳です。地産地消だけではなく、旬の物を旬の時期に食べる「旬産旬消」、或いは冷凍しなくても即食べる「旬産即消」というのが一つのキーワードとして出てきておりますし、そういう物が非常に展開できるという地域ではないかと思います。

更に、その地域を支えるために、先ほど理事長のお話にもありました、土地改良区が当然農業或いは地域の維持、施設の維持以上にまた、地域の方々と一体となって地域発展に、地域振興に寄与されていることは非常に期待できるお話だと思いますし、是非モデル地域として、また、市内でも有数のモデル地域として先導的な役割をして頂ければありがたいと思います。

**伊藤教授**　ありがとうございました。簡単なまとめをさせていただきまして、この座談会を締めさせていただきたいと思います。

お話をお聞きしながら一つ感じました事は、この地域の基盤を支えているのは親松排水機場という「大魔神」と言って良いと思うのでございます。

亀田郷は農地を含む、非農地を含めますと1万1千ヘクタールになります。住んでいる人口は26万3千人という非常に大きな規模でございます。

これだけの都市機能の基盤を支えているのが私は親松機場であろうと思います。しかしその存在が十分にまだまだ知られていないのではないかという想いがいたします。この土地の2／3が日本海の水位より低いという事や、この信濃川とか、日本海の水位に対して非常に低いこと。それを吐き出している存在が親松排水機場なんですけれども、それが農業排水機場であり、また農業の期間が終わっても、365日24時間休みなく働いているというふうなことは非常に重要な事であろうと思います。大魔神の存在はそういう意味でもっともっと市民の皆様方にピーアールしていただきたいなと思います。

二つ目は、司馬遼太郎が映画「芦沼」を観終えた時に絶句したのと。その場所がここ亀田郷だった訳ですが、地域の皆様方の大変なご努力、ねばり強いご努力で、今日の美田が作り上げられて参りました。

その美田は食糧生産という大きな使命を担ってきた訳でありますけれども、今、都市住民との交流とか共生、環境保全といったような新しい役割が期待される状況になってきたというふうに思います。

そういう意味で亀田郷が全国に先駆けて取得された環境用水の水利権は、今後の水質改善とか生態系の保全に非常に大きな貢献をしていただけるものというふうに期待するものであります。

最後に、三点目といたしましては、こうした水と土の新しい文化風土を作り上げていくためには生産者と市民の間にも、新しい時代を見据えたような関係の構築が期待されるという事ではないかと思います。例えば、地域作りとか、水環境問題に意思決定とか意思判断できるような「水管理委員会」という、いわば水の地域政府のようなものでございます。

既に我が国ではこの、農地・水・環境保全向上対策などの場面で、工事の施工にも多様な主体の住民を交えた人達が工事の実施に参加する直営施工が始まっているというようでございます。

亀田郷土地改良区でも管内では環境整備連絡会とか、或いは地域用水対策協議会などの場を通して、住民の皆様方との枠組み作りを熱心に進めてこられました。今後はそうした活動がさらに発展をしていって、この地域を皆で見守っていくというふうな意識の高揚に繋がっていただければ、一層発展するのではないだろうかというふうに思う次第でございます。

本日は誠にありがとうございました。以上をもちまして、座談会を締めさせていただきます。